

平成 29 年度
高浜町原子力防災訓練支援
実施結果報告書



平成29年12月19日

地域住民のための原子力緊急時援助隊

NPO法人 ワネッツ

目次

1. 実施目的
2. 実施日
3. 実施場所
4. 実施体制
5. 実施概要
6. 実施計画と異なった点
7. アフターアクションレビューの結果
8. 見出した事実
9. 得られた教訓

添付資料

1. 活動写真
2. 新聞報道
3. 訓練支援用 **ICS** フォーム
4. 訓練支援用ミッションシート

1. 実施目的

高浜町が計画実施する平成 29 年度高浜町原子力防災訓練(福井県原子力防災訓練個別訓練)において、NEATR コマンドシステムを用いたリアルな想定に基づき、高浜町から要請を受けた支援を確実に実施するとともに、参加する NEATR 隊員の知識・技能の向上をはかる。

2. 実施日

小浜方面事前打合せ 平成 29 年 11 月 24 日(金) 17:30~20:00

敦賀方面事前打合せ 平成 29 年 11 月 25 日(土) 17:00~20:30

(この日で NEATR 指令本部を模擬)

高浜町訓練支援 平成 29 年 11 月 26 日(日) 08:00~12:30 (集合時間 08:00)

3. 実施場所

(事前打合せ)

小浜方面事前打合せ 小浜市四谷町 NOP 法人ワネッツ事務所

敦賀方面打合せ 敦賀市白銀町 WATS 事務所

前日 NEATR 指令本部 同上

(高浜町訓練支援)

高浜町役場 1 階相談室 高浜町宮崎

旧音海小中学校避難室 1-2 高浜町音海

内浦公民館 2 階ホール 高浜町山中

青郷公民館 2 階ホール 高浜町青

関電 NPTC1 階ウェルカムホール 高浜町水明

4. 実施体制

(事前打合せ)

小浜方面打合せ N123 治面地明、N739 岡本博、N758 清水宗賢、N906 岩崎良人

敦賀方面打合せ N223 逢坂隆幸、N187 山本義博、N658 帰山昇、N378 孝治広幸、
N489 肥田善雄、N133 穂村政道、N668 富永恭、N906 岩崎良人

前日 NEATR 指令本部 N489 肥田善雄、N133 穂村政道、N668 富永恭、N906 岩崎良人

(高浜町訓練支援)

NEATR 支援本部 N489 肥田善雄、N758 清水宗賢
 旧音海小中学校放射線 WS N906 岩崎良人、N366 坂本進、S723 伊藤博
 内浦公民館 WS N668 富永恭、N909 上野文男、N685 帰山昇、N147 小湊幸浩
 青郷公民館放射線 WS N877 塚本重信、N283 神野佳枝、N739 岡本博、N123 治面地
 明
 関電 NPTC 放射線 WS N133 穂村政道、N982 浜上満理子、N774 神田出、N378 孝治
 広幸

5. 実施概要

(事前打合せ)

「高浜町原子力防災訓練支援放射線測定ワークショップ実施要領」に基づき、当日の実施内容の最終打合せを行った。

(前日 NEATR 指令本部)

25 日(土)の 17 時 59 分に以下の cp1 ミッション参加要請メールを発信した。

件名	【訓練 COMD ALL REQ】(訓練) 原子力災害支援活動の参加要請について
宛先	登録全 NEATR 隊員
内容	訓練ですので、実動は必要ありません。 可能な方はコマンドウェブ (http://neatr-org.jp) 隊員番号; neatr PW: 147258 の RBX1 で応答ください 訓練 高浜町原子力防災訓練支援 コマンドシステム訓練用 事象 高浜発電所 3 号機 2 次系給水喪失 エリア MS 7 (放射線防護対策施設) 参加可否を、NEATR ウェブ RBX1 で回答願います 詳しくは、ICS フォーム 201 で http://neatr-org.jp/ (ICS フォームの PW: neatr1711) 発信日時 18 時 00 分 発信者: 岩崎

この cp1 ミッション参加要請メールに対する応答は以下のようであった。

RBX1 応答	応答率 28 名 / 141 名 = 19.9%
参加可否	可能 23 名 不可能 4 名 検討 1 名
参加時間	2～6 時間後 17 名 6～12 時間後 3 名 12～24 時間後 3 名
健康状態	良 14 名 普通 9 名
参集手段	マイカー 22 名 公共交通 1 名

(高浜町訓練支援)

(1) NEATR 支援本部

当日は若狭高浜駅で 08 時に全員集合した。そこで、機材を分配するとともに、駐車場が狭いため乗り合わせで行ってほしいこと、現地についたら応答チェックボックス RBX3 で応答してほしいこと、可能であれば現地の写真を指令本部に送ってほしいこと、および終了後アフターアクションレビューをするので高浜町役場に集まってほしいことを要請した。

高浜町役場の NEATR 指令本部では、COP 1「全体活動図」を張り出すとともに指令本部パソコン(白)に入ってきた現地隊員の応答チェックボックス RBX3 の応答を COP 1 に反映した

9 時 30 分から、参加者人数の多い青郷公民館へ支援に向かった。到着時青郷小学校のエアーテントの設営を行っておりこれを写真に収めた

10 時 30 分に高浜町役場にもどり、町長他へのご挨拶を行おうとしたが、会議中であつたため、野瀬町長自ら会議を抜け出す形でごあいさつができた。このとき教育長もご紹介いただいた。

その後、隊員からの RBX6 の応答を COP 1 に反映した。可能性として、高浜町役場の幹部の方の見学もあり得るとしていたが、実際の見学者はなかった。

終了後、全員の帰還を待ち、高浜町役場前の広場での記念撮影を行った。集合の目的としたアフターアクションレビューは実施されなかった。

RBX3～RBX6 の応答は次のとおりであった。なお、RBX6 の応答は本報告書「8. 評価」に示す。

RBX2 ミッション指令受信確認応答	3 名
RBX3 現場セルフチェック応答	5 名
RBX4 現場ミッション開始応答	1 名
RBX5 現場ミッション経過応答	1 名
RBX6 現場ミッション終了応答	10 名

(2) 旧音海小中学校放射線 WS

現地到着後、高浜町役場の職員の方と打合せを行ったが、NEATR が来ることはご存じなかった。そのため、参加者を 2 班に分け、2 度放射線防護対策施設の運営を行うことなど当方から要請し、了解をいただき、そのとおりに実施していただいた。住民参加者は 30 名程度であった。なお、この施設に放射線測定器が備え付けられているということをご存知なく、当然、その場所もご存知なかった。このあたり、最初、高浜町との間でもっていた、放射線測定器の備え付けがあるのでこう使うんだということを説明する場というのが喪失してしまった。

ワークショップは 2 班に分け、1 班を天然放射線の測定を行い、もう 1 班をパネ

ル・模型展示と分けた。住民の多くは放射線測定の方に向かったが、最初の班は能動的に何かを行うという姿はなかった。時折、住民の方が「これは溶接棒だ」といった声が聞こえた。次の班は、見かねたであろう、福井工大の砂川先生が説明約にまわり、詳しい計測器の説明をされたため、参加住民は熱心に聞いていた。やはり、こういった場面で特別の目的意識を持たない参加者が能動的になることはないという状況であった。もう一方のパネル展示は2〜3人／1回と非常に少なかったが、その分、この住民の方との会話がはずんだ。たとえば、消防団はここに来ずに逃げるかどうかとか、ピラミッドを透視するミューオンとか、RI 治療のすさまじさとか。とある方から「おまえらは国から来たのか」という質問があり「いいえボランティアです」と回答したら、妙に親しい顔になったのが印象に残った。

ワークショップが終了した後、片づけを行い、砂川先生の講演を1時間ほど聞いた。この場所を担当する NEATR 隊員の誰一人スマートフォンを持っていなかった。そのため、応答チェックボックスの応答はできず、また状況写真も撮れなかった。なお、写真については、高浜町職員の方が撮影されていたので、それを後日メールで送付していただいた。

なお、講演をされた福井工大の砂川先生にご挨拶に行ったら、先生から「放射線のことなら協力できる」というご挨拶をいただいた。あまりにも、当方のワークショップが拙かったからだと思われる。

(3) 内浦公民館放射線 WS

内浦公民館でも担当される高浜町役場の職員に NEATR が何をするかが伝わっていなかった。そのため、会場も公民館2回の多目的ホールとなり、また、2班に分けることも実施されなかった。

そのため、参加住民への事前説明で NEATR が何をしているのかを紹介されることはなかったし、NEATR のワークショップを動的に理解されようとする住民の姿はなかった。

なお、福井新聞の記者の方が興味を示され、質疑を行った。後で問い合わせすることであったが、問い合わせはなかった。

ワークショップ終了後、〇〇先生の講演を聞いた。

・W/Sに福井新聞の記者が来て、「この組織の設立は何時か?」、「OBとして新基準はキビしいと思うのか?」

との質問があり、前者には「昨年12月」、後者には「安全を確保するため十分キビしい基準になっていると思う」と回答、この組織のついて聞きたいことがあれば岩崎事務局長に聞いてくださいと伝えた。

(4) 青郷公民館放射線 WS

青郷公民館でも担当される高浜町役場の職員に NEATR が何をするかが伝わって
いなかった。高浜町の担当者に 1 階の会議室と聞いていますがどこでしょうか？と
尋ねたら 2 階のホールでお願いしますとのことであった。

そのため、1 階の会議室でなく、会場も公民館 2 回の多目的ホールとなった。もし、
1 階の会議室で設営したら、まったく誰も見向きしなかった可能性が高い。そういつ
た意味では多目的ホールに設営したのは僥倖と呼べるだろう。

2 回ホールの詳細な位置は動線を考えて出口付近とした。

そのため、参加住民への事前説明で NEATR が何をしているのかを紹介されるこ
とはなかったし、NEATR のワークショップを能動的に理解されようとする住民の姿
はなかった。実際、青郷小学校の放射線防護対策施設の運転が終わった後、けげんな
顔ちらっと NEATR 展示を見て講演会の関につくような状況だけであり、質問はお
ろか、特段の関心を示していただくことはなかった。

ただ、講演をされた福大 N 研の泉先生からは、「こんなことしているのなら紹介し
たのに。今後とも協力していきましょう」というご挨拶をいただいた。泉先生にもま
た事前に NEATR が何をするか伝わっていなかったことになる。

(5) 関電 NPTC 放射線 WS

今回参加された方は、住民の方が 30 名程度、消防団等関係者を含めた全体で 40 名
程度であった。

最初に町役場の方が、「今回のような避難は実際には諸事情で退避することが困難
な方々が対象となるものであるが、このような施設であることを紹介するもの。2 班
に分けて放射線防護対策施設の見学と NEATR による放射線や検出器等の説明を交
互に行う」という段取りをされた。このため、この場所は、会場と 2 班分けは当初予
定どおりであった。当初、質問があれば NEATR が説明を行う対応の予定であった
が、天然線源測定と全員を対象に講義形式でパネル・模型による天然放射線の説明と
線源を使った検出器の説明を分担し、2 回実施した。

段取りができていたため、参加住民の質問や意見もあった。ただ、本来高浜町が
回答すべきであろう住民の方の関心は、どちらかというと和田地区はヨウ素剤が配
布されてないとか、避難の時はどう対応するのか等パネル・模型以外の領域の行政が
回答すべき質問がものであった。

最後に、福大の安田先生が「ヨウ素剤の配布は、PAZ には行われているが UPZ 等
それ以外は、住民の方の希望に合わせて行うべきと思うので、希望があれば要望して
いくことで対応されるようになるのではないかと。ヨウ素剤は値段的には安いですが医薬
品で副作用もあり更新等管理が難しい。また、効果が出るよう行政の指示に従って服
用してもらうことが重要。避難する時には、放射性物質を木造家屋で 5 割、コンクリ
ート造で 9 割くらい防げるが、慌てて車で出ると全く防げない状態になる、この状態

で渋滞に嵌ると最悪なので、あわてず対応すべき。放射性物質が衣服等に付いても、比較的容易に落とせる。」等分かり易く説明をされていた。

(プレス発表)

- (1) 高浜町原子力防災訓練は、高浜町によって内浦公民館訓練についてプレス取材案内された。事前の高浜町との打合せで、NEATR は独自のプレス発表をしなかった。
- (2) 結果的に、NEATR の活動は、記事とならなかった。プレス各社の翌日の新聞を参考資料に示す。
- (3) 内浦公民館において、福井新聞から NEATR に問い合わせがあったが、この場限りのものであった。

6. 計画と異なった点

今回の支援は高浜町支援を目的としているため、様々な点で、実施計画および実施要領と異なったことが発生している。このことは、次回以降の活動で、支援先との事前調整に生かしていくこととする。

(事前打合せ)

- (1) 計画では 20 人参加を予定していたが、結局 17 人参加となった。もともと限られた範囲の電話感触で 15 人参加見通しであったが、このうち 5 人が不参加となり、京阪神方面の参加者募集や、直接電話で勧誘した結果、7 人の追加参加となった。なお、隊員全員に郵送参加可能問い合わせをしたが、この回答はがきで 2 名の脱退通告を受けている。こういった状況は、今後も発生すると想定される。
- (2) 高浜町からのプレス取材案内場所が青郷小学校・公民館から内浦公民館に変更された。理由は青郷小学校のエアートントが大きすぎて取材カメラに入らないというものであった。
- (3) 青郷公民館を除き各 WS ミッションエリアとも 2 班～4 班で区分し実施する計画であったが、最終的な高浜町との打合せにより、どこも 2 班区分になった。このため、各区分の人数割りを修正した。さらに、100 人もの参加者に限りある体制と機材で体験的学習(ワークショップ)をしてもらうことは不可能と考え、質問を受けた人や興味ある人に説明する展示会型ワークショップとした。
- (4) 実施要領にはミッションエリアを MS2 (1 次集合場所) と誤記をしていた。cp1 メールで指令した実際のミッションエリアは、MS7 (放射線防護対策施設) であった。これは実施要領を前回分からコピー作成する際の単お純な修正漏れである。

(前日 NEATR 指令本部)

- (1) 実施計画書では cp1 ミッション実施要請 (出動可能と RBX 1 で回答した隊員のう

ち、参加予定者にはない隊員へ待機要請を発することも含む）を発信するとした。しかし、実際には cp1 ミッション実施要請は発信されなかった。これは、実施要領のかなでは cp1 ミッション実施要請は出たものとして扱うように記載しており、計画書そのものを変更しなかったためである。

- (2) この指令本部設置は、cp1 ミッション参加要請メールを多くの役員に経験してもらいたいと考え設定したものであるが、事前説明と重なっている中時間がとれず、結局、事務局で発信した。

（高浜町訓練支援）

- (1) 高浜町役場において、事前情報では高浜町災害対策本部の野瀬町長等 10 時頃から手すきになり、ご挨拶も可能で指令本部ご視察もあり得ると考えていたが、実際はご多忙な状況であった。なお、野瀬町長とは立ち話でご挨拶ができ、また、教育長もご紹介いただいた。
- (2) 各 WS とも、高浜町施設備え付けの放射線測定器が現地において提供されるはずであったが、現実には福井県環境監視センターの線量計が役場職員の方から提供された。これは、実施目的の 1 つが未完に終わったことを意味する。
- (3) もとものと高浜町との打合せでは、一旦参加住民を集め、意義や目的を説明される中で NEATR のワークショップを紹介いただく予定で展示会型ワークショップを計画したが、途中で要請した音海小中学校と関電 NPTC を除き、参加者に NEATR のワークショップが参加住民へ事前に説明されることはなかった。NEATR の事前紹介ない場合は、誰か何か変なことをやっているで終わってしまったが、事前紹介あったケースは、それなりに有意義なワークショップとなった。
- (4) 計画していたアフターアクションレビューが実施されなかった。終了時間が予定を過ぎていたため、後日のメールで行おうと考えたためであるが、これは大きな失敗であった。タイ時間でも良いので計画書どおりにアフターアクションレビューを実施すべきであった。

7. アフターアクションレビューの結果

前項のごとく、メール方式でアフターアクションレビューを行った。やはり、この方式では臨場感が欠け、本来の意味を失ってしまう可能性が高い。以下にメール返信を受けた参加者レビューの結果を示す。

- ・ 和田地区では、2 班に別れ説明を要求された。高浜町発行の避難マニュアルに記載されているようなことでも質問され、更なる工夫が必要です。文科省の小学生教師用解説書を参照に、パネル 12 の説明文を作ってみます

- ・やる気のある隊員のモチベーションをすぐに結果になったと思われ残念である。
- ・事前説明参加など各人が準備したことを発揮できる機会がなかったこと。すべてが無駄になっていた。
- ・小学校と公民館でばらばらに実施されて公民館は 10 時過ぎまで何もすることなかったので、事務出身の隊員がパネル説明用に一生懸命質疑応答をしていて、どう説明しようかな〜と真剣に事前勉強していたのが〜総括として残念でたまらない。（住民のニーズがないのか？）
- ・会場へ来られた、帰られる住民の方々には目を見てご挨拶をしていたが、知り合い以外は、返答などはなく、胡散臭い目で見られたこと。話を聞きに來ただけ（時間つぶし）の感。
- ・町職員の方もわれわれに対して迷惑顔されたこと。
- ・住民の方々には我々の活動などは説明されていないと感じた。
- ・やはり人は何らか、少しでもいいので達成感が必要と考える。
- ・訓練支援するには存在感がないものは如何なものか？
- ・AAR（アフターアクションレビュー）は重要なことで、NEATR のマネジメントの根幹の一つと認識していましたが、なんかだだらの流れ解散的なものになってしまっ
て申し訳なかったと思います。次の予定がある方は先に帰ってもらっても良いので、多少時間が伸びてもきちっと各所の報告と教訓をみんなで共有すべきと思います。
- ・本部としては、町役場の相談室に、8 時 30 分までに設営して、COP 図を張り出し、4 か所に出向いたメンバーとミッションを付箋に書いて貼付け、一目でわかるようにしました。町職員の見学はありませんでした。
- ・10 時 45 分ごろに町の指令本部を訪ねましたが、まだ実施中で入れませんでした。外でどうしようかと待っているとほどなく終了してみみんさんが出てこられたので町長を捕まえて挨拶ができました。なんかお急ぎの様子で 1, 2 分の話しかできませんでしたが、NEATR も来ていることはお伝え出来たと思います。
- ・RBX 3 と RBX6 の応答を頂きましたが、電話で催促して送ってもらうこととなり、事前の対応要領の徹底が足りなかったことが教訓です。
- ・また旧音海小中学校のメンバーはいずれもスマホがなく RBX が送信できない人ばかりでしたので、電話で依頼を受けて本部で RBX に入力しましたが、スマホを持っていない隊員とのコミュニケーション方法をルール化しておく必要があります。ガラケーのショートメールや、音声通話でのやり取りを標準化する必要があります。
- ・青郷公民館に 1 時間ほど行きましたが、体育館内のテントはすごいもので感心しました。以前にマスコミに公開しているならよいのですが、マスコミに受けそうなインスタ映えする写真が取れそうなどでした。マスコミはこちらへ呼んだ方が良かったのではと思いました。
- ・泉先生の講演のさわりを聞きましたが、大変上手で資料も良い感じでした。

- ・ NEATR の隊員向けにこの資料で安田先生に研修をしてもらうのが良いと思います。隊員がいざとなればこの資料で住民の皆さんに説明ができるぐらいになっておく必要があります。
- ・ 私だけに限らず、ほとんどの隊員が入力の仕事や根本的に本コマンドシステムを理解していないのではないかと危惧しています。70 名の隊員全員に本システムを理解させないと、実際本当に出動命令が出ても、使い方を理解していないためにだれも集まらない状況になるのではないかと思います。大変でしょうが、システムの使い方についての隊員の教育をする必要があります。
- ・ それと、専門の先生による放射線に関する教育等も必要かと思いました。
- ・ 訓練に参加して感じたことを言わせてもらいますと、私だけかもしれませんが、メールによる指令で隊員が動くことになるのですが、RBX 1～RBX6 までのそれぞれ記入して送信することになるのですが入力の仕方が分かりませんでした。
- ・ 取りあえず入力したのですが間違いがたくさんあったと思います。
- ・ 解散する時は参加者の方に講評を聞き今後の参考にすべきかと思います。又、解散する時は、参加してもらった方が帰るまで、役員は見送ったほうが良いのではないのでしょうか、何か違和感がありました。

8. 見い出した事実

NEATR コマンドシステムの応答チェックボックス RBX6 により、本活動のパフォーマンス評価を行い、上述のアフターアクションレビューで重要な事実の抽出と教訓の選定を行う計画としている。

まず、NEATR コマンドシステム RBX6（活動終了報告）による本活動のパフォーマンス評価は以下のとおりある。

満足度	満足	6	どちらでもない	4	不満足	0
達成度	100%2 人、90%3 人、70%1 人、60%1 人、50%1 人、10%1 人、0 %1 人					
課題の所在	NEATR 体制 10 人					
課題の内容	全て入力しないと送れない。ほぼ問題なし。業務内容等の明確化が必要。					

なお、「課題の所在」はウェブ上、「現場責任者所属」と誤表記しており、事前に説明周知ができていないので、評価に用いることはできない。これを含めて、NEATR コマンドウェブ上の様々な課題は、この報告書とは別にまとめて対応する必要がある。

この事故評価を、前回パフォーマンス評価した平成 29 年度 NEATR コマンドシステム研修(平成 29 年 10 月 10 日実施)と比較すると次のようになる。

	コマンドシステム研修	高浜町訓練支援
母数	7	10
満足度	50 点	<u>80 点</u>
達成度	68.6 点	60 点

両指数とも点数が高ければよいというのではなく、中央値の 50%を大きくはずれると、対策必要レベルであると判断しようとしているが、今回の満足度 80 点はこのレベルにあるといえる。考え方によっては、まったく不満足であった人は回答しなかったと考えたと満足度は 47 点となり対策不必要レベルとなる、しかし、これは確認することができない。このため、満足度が高すぎることの対策を検討する必要がある。

この満足度は、参加者個々人が抱く共通目標に対する充足度であり、参加隊員の目標や目的意識を低くした、もしくは低くせざるを得なかったといったことや、そもそもの RBX6 の設定そのものに対する感覚（この程度にしておけ）の影響もあり得るだろう。しかし、本報告書では、アフターアクションレビューの結果との総合比較で、前者の立場、目標が高くできなかったという評価とせざるを得ない。もともと、このような方式をとったのは、何かを住民に教えるということよりも、隊員と住民が同じ目線で話ができる会話（ダイアログ）を通じて、隊員の足りないところを自己判断してもらう意味もあった。無論のこと、その意味合いを参加者に事前に十分周知できていないという課題もある。

見出した事実①

こういったパフォーマンスインジケータ（PI）で、理想を 100 として何点といった評価点（スコア）方式のものはたくさん出回っているが、品質管理の UCL(上限管理値)や LCL(下限管理値)の方式によるパフォーマンスインジケータは、おそらく、NEATR が初めてのものだろう。このような方式がパフォーマンスの評価に有効かどうか、もう少し実績を積んでから判断する必要がある。

アフターアクションレビューでは、なんといっても直後の現地でのアフターアクションレビューを実施しなかったことが挙げられる。これはメール指摘にもあるように、区切りをつける必要性と次回以降の隊員の参加意欲にもつながる重要事項である。

見出した事実②

さらに、現地において計画したとおりに段取りが進まず、浮いてしまった状態で大きな失望感が生じ、やる気のある NEATR 隊員のモチベーションをすぐに結果になったというアフターアクションレビューの結果も重要な事実として抽出すべきであろう。無論のこと計画どおりことが進めばよいが、これまでの活動経験や今回の実績からしても、そうはならないと断言しても良いだろう。計画をより精緻にしたところで、場所、人、時期、

状況などが時々刻々異なるため、全部を書ききれず標準的になるだろうし、何よりやってみなければわからない点が消えることはないだろう。だから、規則（コード）でも標準（ガイド）でもなく、「計画（プラン）」と称する所以であろう。計画計画どおりに進まないことのモチベーションの保ち方をどうするか検討する必要がある。

見出した事実③

9. 得られた教訓

(1) 見出した事実①：隊員の目標や目的意識

東日本大震災のとき、米国軍の「トモダチ作戦」は「日本の自衛隊の欲するところはなんでもせよ。」という目標を隊員に与え、その結果、大成功したといわれる。軍隊であるから、敵を打つという高度の戦闘スキルは持っているし、自国民保護も一つの要素になっているのは事実であろうが、しかし、災害救援ができるよう訓練された組織ではないことも事実だろう。米国内で災害が発生すると、連邦軍が出てくることはないが、災害に伴い夜間外出禁止令を発令した場合、州軍は拳銃を持って治安維持にあたる。そのような敵または不心得者が存在しない災害救援に与える目標として、東日本大震災に対応するため、米国太平洋軍は自衛隊の配下に入ることを命じたのである。これは当然や必然の出来事ではなく、米国太平洋軍司令部の相当の英断があったことだろう。

今回の高浜町原子力防災訓練支援の目的を、米軍「トモダチ作戦」の「自衛隊」を「高浜町」に置き換えるべく、「高浜町から要請を受けた支援を確実に実施すること」とした。しかしながら、NEATR 隊員にとって、この「高浜町から要請」は支援開始前の配布された実施要領にすでに反映されているものであり、この実施要領どおりに動けばよいと解釈された。

また、現地において、5 か所あるミッション全部について、現地の高浜町職員から実施要領どおりの要請が来るとは限らないという状況も想定されたため、「参加住民と会話（コミュニケーション）して」という目標も口頭で伝えた。しかし、なぜかということを説明していなかったため、口頭目標がコンテンジェンシープラン(不測事態対応計画)であるということは、参加した NEATR 隊員に伝わらなかった。

今回の高浜町原子力防災訓練の想定では、高浜町役場職員 100 名ほどで住民約 200 名を動かすものであるが、実際の時は同じ事象が発生したとして、高浜町役場職員 100 名で住民約 11,000 名を動かすことになる。今回、訓練でさえ、計画した情報が伝わらないケースもある（もちろん伝わっているケースもある）ことから、実際の緊急時も同様な状況の発生も想定される。

そのため、自治体等外部訓練において、現地に派遣された NEATR 隊員は、現地の自治体職員の欲するところをつかむこと、および、その欲するところが事前の想定と異なるケースもあることを、実施計画に明記すべきである。

なお、この教訓は、あくまで相手がある自治体訓練等への支援であって、NEATR 内部の訓練等に適用するものではない。

(2) 見出した事実②：アフターアクションレビューの実施

国内外を問わず、コマンドシステム（高い目標に到達するための指揮統制）を適用する団体は、現実の対応や訓練の対応を問わずアフターアクションレビュー（AAR）が実施されている状況にある。この AAR をどう行うかの、規則的なものは見つからないが、全体としていえることは、ミッション完了後即座に行うこと、現地で行うこと、全員が参加すること、AAR リーダーを指名すること、短時間で課題を数点に絞ること等が共通原則になっているようだ。これらは、適用したコマンドシステム（机上作成）には見えざる脆弱性（ブルーナビリティ）がそれこそ無限大にある、それを体験（現場実態）から見出し、グレーディッドアプローチ（課題に優先順位をつける）で改善につなげることにあると考えられる。

NRATR はコマンドシステムを適用しているため、AAR を実施しなければならないが、今回の高浜町原子力防災訓練では、予定終了時間を過ぎため、後日メールで行うこととした。これは、現地で全員参加という AAR の共通原則を踏まえていないものである。

今後、実施要領等に短時間でも必ず AAR を実施すること明記することおよび、なんらかの方法で、どの単位で AAR を実施するのか、誰が AAR リーダーなのかを明示することの対策をとる必要がある。

(3) 見出した事実③：計画どおりに進まないときのモチベーション保持

見出した事実③では、計画したとおりに活動が進まないのは半ば当然である、計画外のことが起きたときにどうやって NEATR 隊員のモチベーションを保持するかの問題があるとした。

NEATR は、もともと、隊員の意思で成り立っており、その意思を阻害する要因は、何としてもなくさなければならない。

一つの考え方として、実際の緊急時であれば能動的な意思は出るだろうが、平常時であれば受動的な関与しかしないという考え方がある。これには、原則として平常時活動にも NEATR コマンドシステムを使い、ICS フォームやミッションシートをその都度作成し、敢えてのプラント事象も想定したうえで、指令メールを発信すること

で、臨場感を造形しようとしている。おそらく、その効果は、現実的に発揮されていないだろう。

やはり、NEATR コマンドシステムのステップを追って活動を展開すべきだろう。今回は NEATR コマンドシステムが有効に活用されなかった、したがって、今後は、このシステムを有効に活用するよう具体策を検討していく必要がある。

もう一つの考え方として、意思はあるが、具体的になにをするか、その内容は都度指示されるものだということである。NEATR コマンドシステムは、ミッションシートで、いつ、どこへ行くか、誰と一緒に、その場所の指揮者は誰かといったようなことを指令するが、「何をするか」については項目だけを記載し、現地の指揮者(今回の場合は高浜町職員)と打合せし、詳細な内容を確認するとしている。これは、そもそも誰に対して支援をするかということを明確にするためとっている方法であり、緊急時マネジメント対応原則の「柔軟性」、「能動性」や「包括性」を最大考慮した形である。

今回においては、全箇所とも初めに現地高浜町職員と打合せする等、ステップは確実に実施されているが、いかんせん期待された支援要請が高浜職員から出なかった状態と言えよう。

逆に、期待された支援要請以上のものが出るケースも考えられよう。このため、そういう状況が発生しても、

以上

写真

(集合場所)



(音海小中学校)



(内富公民館)



(青郷小学校)





(高浜町役場)

